

夕霧に 千鳥の鳴きし 佐保路をば

荒らしやしてむ 見るよしを無み

まじかたのおおきみ
円方女王(巻二十・四四七七)

この歌は、756年(天平勝宝八歳)に大伴池主の邸宅で開かれた宴席で、古歌の伝誦を得意としていた大原今城が披露した歌4首(『万葉集』四四七七〜四四八〇番歌)のうちの一首です。題詞によると、智努女王が亡くなった後に円方女王が悲しみ悼んで作った歌とあり、挽歌

の名作として記憶されてきました。歌の内容からは、生前の両女王の仲が良好であったことがうかがえます。作者の円方女王は、『続日本紀』によると長屋王の娘で、774(宝龜五)年に亡くなっています。一方の智努女王は『続日本紀』に叙位記事が見えるものの系譜が不明でした

やまと
万葉がたり

が、1988年に見つかった長屋王家木簡の中に「円方若翁」「珍努若翁」(「珍努」は智努の別表記)という人名が書かれたものがあり、2人の関係が判明しました。「若翁」は「わかみたふり」と読み、長屋王家木簡では長屋王の子女に限った敬称として用いられています。よって、智

努女王は円方女王と同じく長屋王の娘であり、幼少期には父の邸宅で共に育った姉妹であることがわかったのです。後世の史料によると、この姉妹は元明天皇の時に伊勢神宮へ派ると、智努女王と円方

遣されたことがあるようです。伊勢神宮には未婚の皇女を天皇の使者として派遣する齋宮の制度がありましたが、奈良時代までは常時任命されてはいませんでした。史料によると、智努女王と円方

研究員・竹内亮

【訳】夕霧に千鳥が鳴いていた佐保路を荒らししまうのだろうか、あなたにお逢いできなくなるので。

女王はそれぞれ1度ずつ伊勢神宮に参入したとあり、1回限りの使者として元明天皇から任命されたようです。これが事実なら、姉妹は伊勢神宮への派遣という希有な体験を共有していたことになり、関係の深さやうかがわれます。あるいは、2人は同母姉妹であったのかもしれない。

難波門を 漕ぎ出て見れば 神さぶる

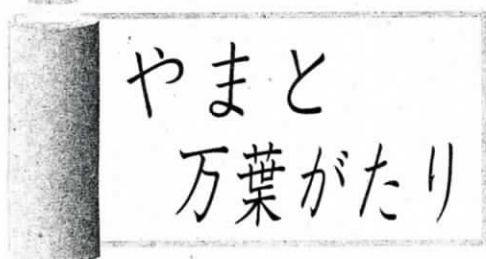
生駒高嶺に 雲そたなびく

大田部三成(巻二十・四三八〇)

現在の大阪湾を西へと進み出した船上から生駒山の上に雲がたなびく様子を歌ったこの歌、一見何気ない風景描写のようにも思えます。しかし、実は作者のただならぬ悲壮な思いが込められた歌なのです。

この歌を含む『万葉集』巻二十に収められた80首余りの歌は、「防

人歌」と呼ばれていいます。防人とは古代の軍役の一種で、東海道・東山道諸国(現在の東海・関東地方)から徴兵され、西海道諸国(現在の九州地方)沿岸の防備に従事しました。任期は3年間でしたが、任地で留任したまま故郷へ帰れなかった者も多く、過酷な兵役でした。



時は755年(天平勝宝七歳)2月、任地へ派遣される防人たちが難波(現在の大阪)に集結させられ、西海へと向かう船の出発を待っていました。当時、兵部少輔(防人を管轄する兵部省の次官)の任にあった大伴家持は、公務のため難波に滞在していました。家持は東国諸国からの

防人部領使(引率責任者)に命じて防人たちの歌を集めさせ、その中から優れた歌だけを選んで記録しました。この歌もそうした防人歌の一つで、作者の大田部三成は下野国梁田郡(現在の栃木県足利市付近)から

かと思われます。いったん難波の津を出航してしまつと、はるか故郷からたどってきた陸路は次第に見えなくなり、難波の背後にそびえる生駒山がその見納めとなります。三成にとつて、生駒山は故郷との決別の象徴であるとともに、この先の危険な海路を神々しく見守ってくれる存在でもあったのでしよう。

【訳】難波の津を漕ぎ出して見ると、神々しい生駒の高嶺に雲がたなびいている。

(県立万葉文化館主任 研究員・竹内亮)